

〔学会〕 第1292回 千葉医学会例会 第4回臨床研修報告会

日時：平成27年3月1日（日） 9：00～16：10

場所：千葉大学医学部附属病院 第3講堂

1. 先天性肺動脈分枝狭窄症の1例

武田健治, 笠井 大 (千大)

症例は51歳男性。2013年12月に咯血が出現したが、自然に軽快した。2014年3月に再度咯血が出現し、当院に緊急入院となった。咯血は自然に軽快したが、造影CTの3D再構築画像で両側肺動脈の狭窄と狭窄前後の拡張を認めた。右心カテーテル検査で肺高血圧症、肺動脈造影検査でCTと同様の所見を認め、先天性肺動脈分枝狭窄症の診断となった。本症は報告例が少なく非常に稀な疾患であり、若干の文献的考察を加え報告する。

2. Cetuximabによる薬剤性好酸球肺炎を発症した中咽頭癌の1例

栗山彩花, 鈴木健一 (千大)

症例は50歳男性。当院耳鼻咽喉科にて中咽頭癌 cT3N1M0 stageⅢに対し、2014年6月より抗EGFRモノクローナル抗体Cetuximabによる化学放射線治療を施行中だった。8月に発熱と炎症反応上昇、胸部CT上すりガラス影を認めたため呼吸器内科紹介となった。紹介翌日に気管支鏡検査を施行し、経気管支肺生検では有意な所見を得られなかったものの、気管支肺胞洗浄では白血球分画の好酸球が有意な上昇を認めた。化学放射線療法を中止し、ステロイドパルス療法と後療法を開始した。本症例は治療経過中に一度増悪を認めたものの、ステロイド導入が奏功した薬剤性好酸球性肺炎の症例であった。

3. 開始数年後に現れたメトトレキサートによる汎血球減少の1例

浅野公将, 成田知大 (松戸市立)

症例は76歳女性。数ヶ月前からの関節リウマチによる疼痛が増悪したため救急搬送された。来院時、汎血球減少を認め、CT上、大腸穿孔が疑われたため、緊急手術を施行した。明らかな消化管穿孔はなかったが、肝臓表面が粗面で肝硬変が考えられたこと、及び腹水中に白血球が多数認められたことから特発性細菌性腹膜炎が疑われた。また、汎血球減少は入院後自然経過

で寛解、メトトレキサート使用による副作用と考えられた。

4. 経皮的人工心肺装置を導入し救命し得た劇症型心筋炎の1例

三浦史織, 大野祐司 (千大)

急性心筋炎の10%を占める劇症型は30%以上が死亡するが、救命を規定する因子は必ずしも一定ではない。今回我々は臓器障害を残さず救命し得た例を経験した。症例は36歳男性。感冒を契機に多臓器不全を伴う劇症型心筋炎を発症し、当院にて経皮的人工心肺装置を導入したものの第3病日に心停止した。しかしその後心機能は回復し、第5病日に機械補助から離脱。最終的には社会復帰し得た。本症例に文献的考察を加え報告する。

5. 完全房室ブロックを来たしたリウマチ熱の1例

伊藤 竜, 奥主健太郎 (千大)

意識消失を主訴に前医受診し、完全房室ブロックを認め当院搬送となった10歳女児。

溶連菌感染後のリウマチ熱による心炎と診断し、完全房室ブロックに対して一時的ペースメーカーの留置と抗炎症薬、抗菌薬による治療を行った。

治療開始後1日で房室ブロックは改善し、10日ほどで心筋傷害も改善した。リウマチ熱による心炎は予後良好といわれており、短期間で改善した心筋の炎症と心電図変化、房室ブロックに関して考察した。

6. 血漿交換療法が奏功した両眼再発性視神経炎の1例

柿栖将人, 北橋正康 (千大)

56歳男性。右視神経炎 (ON) にて眼科紹介。視力右0.4, 左1.2, 右水平半盲, アクアポリン-4 (AQP4) 抗体陰性, 髄液IL-6陽性であった。左ONも発症しステロイドパルス療法1クール試行。両視力は1.2に改善したが、左ONが再燃し光覚弁となった。追加治療でも視力改善せず。AQP4抗体は陰性だが、両眼再発性視神経炎と髄液IL-6陽性から視神経脊髄炎を考慮し、血漿交換を試行したところ視力改善を得た。

7. 小脳失調で発症し橋本脳症が疑われた53歳男性例 渡邊庸介, 三津間さつき (千大)

橋本脳症は甲状腺機能に関係なく発症する自己免疫性脳症である。治療可能な疾患であるが、多様な精神神経症状を呈するため、見過ごされている患者も多い。近年、本症に特異的な抗NAE抗体の存在が明らかになり、診断の一助となっている。本症例は、歩行時のふらつきで発症し、約1年で失調症状と認知機能障害が進行した。いずれの症状も軽度であったが、ステロイド治療に反応し、一部症状が改善した。文献的考察を踏まえて報告する。

8. 後腹膜膿瘍治療中に小脳歯状核・脳梁・大脳白質病変を呈したメトロニダゾール脳症の52歳男性例 大平健司, 古川彰吾 (千大)

X-1年6月、腹部大動脈瘤破裂の術後に後腹膜膿瘍をきたし、抗生剤点滴にて治療、同年11月よりメトロニダゾール内服を開始した。X年3月下旬より見当識障害・失調性歩行が出現し増悪、同年5月当科に入院した。頭部MRIにて両側小脳歯状核・脳梁・大脳白質に特徴的な病変を認めたことから、メトロニダゾール脳症と考えた。内服中止により見当識は速やかに改善したが、一部症状が後遺した。本症例について文献的考察を含めて報告する。メトロニダゾール脳症は予後良好な疾患とされるが、症状が後遺するケースがあり、継続的なフォローが必要である。

9. 結核性髄膜炎の慢性期に対しステロイド管理が有効であった1例 和泉允基, 中野茂樹 (千大)

17歳女性。他院で結核性髄膜炎の診断となり、抗結核薬とステロイドで治療したが、脳室炎・水頭症を合併したため当科転院となった。ステロイド減量に伴い症状増悪を認め、再増量により速やかに改善する経過を繰り返した。髄液培養とPCRは一貫して陰性であり、まずは抗結核薬中止とした。その後ステロイド漸減した結果、転院後14ヶ月で自宅退院となった。結核活動性の沈静化後も、炎症を主体とした病態が遷延したものと考えられた。

10. 広範囲骨欠損を有する脛骨開放骨折に対し、Masquelet法を施行した1例 戸口泰成, 藤由崇之 (君津中央)

症例は39歳男性。自転車走行中に交通事故にて受傷。広範囲骨欠損を伴った右脛骨開放骨折(42-C3, G-III A)を含む多発外傷を認め、同日緊急手術(洗浄・創外固定)を行った。右脛骨は約5cmの骨欠損を有し

たためMasquelet法による2期的な手術を計画した。まず、VCM含有骨セメントを骨欠損部に留置し、4週後に骨セメントを取り除き自家腸骨移植+プレート固定を施行した。骨移植後3か月で骨癒合を早期に獲得でき、有用性を確認できた。

11. 腰椎すべり症に対する、腰椎前後合併固定術(Oblique Lateral Interbody Fusion: OLIF)にて尿管損傷をきたした1例 海村朋孝, 久保田 剛 (千大)

近年OLIF(Oblique Lumbar Interbody Fusion)は普及しつつあるが、合併症の報告は少ない。OLIFにて尿管損傷を発症した1例を経験したので報告する。

【症例】腰椎すべり症に対しOLIF手術を施行した。術後発熱、腹痛を認め精査の結果、左尿管損傷の診断となった。

【考察】腰椎固定術の合併症を回避すべくOLIFが開発されるも、尿管損傷は注意すべき合併症と考えられた。

12. 高度腎機能障害患者における脊椎固定術後MRSA化膿性脊椎炎に対しリネゾリド投与が有効だった1例 弓手惇史, 稲毛一秀 (千大)

脊椎固定術後MRSA化膿性脊椎炎は、抗MRSA薬投与が一般的だが、その組織移行性の問題もあり治療は難渋する。また副作用である腎機能障害から抗MRSA薬の使用中止を余儀なくされることも多く認める。一方で抗MRSA薬であるリネゾリドは組織移行性に優れ、また腎機能に影響をおよぼさないとされている。当院において高度腎機能障害患者における脊椎固定術後MRSA化膿性脊椎炎に対しリネゾリド投与が有効だった1例を経験したので報告する。

13. 頸椎症性脊髄症に対し手術を施行した後、重症筋無力症を合併した1例 井上嵩基, 稲田大悟 (千大)

73歳男性。2年前より右肩痛と右上肢挙上困難があり、5月前より痙攣性歩行、巧緻機能障害が増悪してきたため当院整形外科受診となった。頸椎症性脊髄症の診断にて頸椎前方除圧固定術を施行した。術後、一過性に神経症状改善するも、一ヶ月後に日内・日差変動ある嚙下障害、複視が出現、重症筋無力症の診断となり免疫グロブリン療法施行し軽快に至った。

14. 化膿性脊椎炎2例のまとめ 鈴木香合, 星野 直 (千葉県こども)

原因菌不明の化膿性脊椎炎2例を経験した。化膿性脊椎炎では血液培養の陽性率の低さと生検の侵襲度の

高さから、原因菌が特定できないことも多く、初期治療には原因菌として最も高頻度の黄色ブドウ球菌をターゲットにした抗菌薬を選択する。同時に菌の侵入門戸を予測し検索すること、MRSA保菌の有無について調べることで、初期治療の効果が十分でない場合に選択する抗菌薬の指標ができることを、症例を通して学んだ。

15. Parkinson病を合併し診断に苦慮したTSH産生腫瘍の1例

石田晶子, 田中知明 (千大)

TSHomaは下垂体腫瘍の2%と稀であり、不適切TSH分泌症候群(SITSH)を呈し内分泌学的に鑑別を要する疾患である。また甲状腺機能亢進症に伴う振戦は非特異的であり、他疾患に伴う振戦との鑑別が困難な場合がある。今回、Parkinson病を合併したTSHomaの1例を経験し、臨床経過が示唆に富む症例であった。腫瘍摘出術後のホルモン推移・症状変化を含め、文献的考察を加え報告する。

16. ACTH非依存性大結節性副腎皮質過形成(AIMAH)によるサブクリニカルクッシング症候群(SCS)を合併した1例

大久保友子, 小出尚史 (千大)

近年、AIMAHはゲノムワイド解析から病態が明らかにされつつある。また、SCSを呈することが多く、Cushing症候群と同程度に生活習慣病を合併する。

【症例】65歳女性。画像上、両側副腎腫瘍を指摘。入院精査でSCS合併AIMAHと診断。

【考察】本例はADH受容体発現が示唆され、大動脈弁閉鎖不全症、複数の生活習慣病を有し、罹患期間・予後・治療法を検討する上で貴重な症例であると考えられた。

17. 糖尿病網膜症に対するラニビズマブ硝子体内投与の治療成績

清水規宏, 忍足俊幸 (千大)

【目的】糖尿病黄斑浮腫(DME)に対するラニビズマブ硝子体内投与(IVR)の治療効果の検討。

【対象と方法】2014年3~12月まで千葉大学医学部附属病院でDMEに対してIVRを施行された36人49眼の、中心窩網膜厚(CMT)とlogMAR視力について、治療前、術後1、3ヶ月の治療効果を検討した。

【結果・結論】対象患者の平均年齢は 62.6 ± 1.0 歳。平均投与回数 2.6 ± 1.0 回。漿液性網膜剝離の有無に関わらず、術後1、3か月ではCMTの有意な改善を認められたが、視力は有意な改善を認めなかった。

18. 難治性ネフローゼ症候群にLDLアフェレーシスが奏功した1例

加藤洋人, 若林華恵 (千大)

59歳男性。他院にて微小変化型ネフローゼ症候群と診断され、免疫抑制療法が行われたが再発を繰り返し、難治性ネフローゼ症候群として当院紹介となった。再生検でも同様の診断で、ステロイド増量や免疫抑制剤変更など行われたが十分な効果得られず、LDLアフェレーシス(LDL-A)を導入したところ尿蛋白軽減が認められた。難治性ネフローゼ症候群に対してLDL-Aを導入したところ、臨床的改善効果の可能性が示唆されたので若干の考察を加え報告する。

19. 病的肥満と睡眠時無呼吸症候群を合併した硬膜外併用全身麻酔による子宮全摘、両側付属器切除術の1例

高井啓有, 奥山陽太 (千大)

59歳女性、X-1年12月からの不正性器出血を主訴に前医受診、卵巣腫瘍と腫瘍マーカー上昇を認め、X年10月当院婦人科紹介受診となった。子宮体癌と卵巣癌の診断となりX年11月子宮全摘、両側付属器切除術を施行した。当科でも術前評価を行っており本症例はBMI $45.9\text{kg}/\text{m}^2$ と病的肥満、AHI 20 回/hの睡眠時無呼吸症候群等を合併した硬膜外併用全身麻酔の貴重な1症例であるため文献的考察を含めて報告する。

20. Henoch-Schönlein紫斑病に小腸ileusを併発した高齢者の1例

栗田遼二, 杉浦信之 (千葉医療センター)

72歳男性。X年11月下旬感冒症状後下腿に紫斑出現し当院皮膚科受診。皮膚生検施行し経過を見ていたが、12月初旬嘔気嘔吐出現。腹部造影CTで小腸の壁肥厚と腸液貯留像を認め小腸ileusの診断。絶食点滴加療で軽快後、小腸内視鏡にて上部空腸に発赤腫脹を認めた。皮膚生検で血管壁にfibrinoid変性と好中球浸潤認めHenoch-Schönlein紫斑病(HSP)で矛盾しない所見であった。HSPの好発年齢は3-7歳だが、今回小腸ileusを併発した高齢男性を経験したので報告する。

21. 多臓器病変の治療経過中に胸骨病変を認めたサルコイドーシスの1例

佐藤 峻, 笠井 大 (千大)

症例は62歳女性。2005年8月、サルコイドーシスの診断となり、眼病変、肺病変に対してプレドニゾロンによる加療を行っていたが、病勢コントロールは不良であった。2014年1月Gaシンチグラフィにて胸骨への集積を認めたため胸骨の生検を行ったところ、非乾酪性肉芽腫を認め、骨サルコイドーシスの診断となった。

サルコイドーシスの胸骨病変は報告が少なく、貴重な症例と考えられたため、文献的考察を加え報告する。

22. 巣状糸球体硬化症によるネフローゼ症候群に対し短期頻回LDLアフェレーシス (LDL-A) を施行した症例

三上行雄, 樗木隆聡 (国際医療福祉大)

症例は58歳女性。1983年にネフローゼ症候群を発症し精査にて巣状糸球体硬化症と診断され免疫抑制療法により寛解維持されていたが時々再燃した。2012年1月より蛋白尿が徐々に増加した。ステロイド, 免疫抑制療法を含めた集学的治療を継続したが蛋白尿の減少傾向はみられず難治性ネフローゼとなった。再燃より数ヶ月経過した症例において短期間頻回LDL-Aを行い蛋白尿が1g/日以下に減少した症例を経験したので報告する。
